

ウシと云はれへ答も無い案するより生むが易いと云ふから當つて見やう、却つて向ふから言寄りたがつて居る所かも知れぬへ、と途方も無い叛逆を起して或晩貞庵が 貞「ナイおぬいさん ぬい」ハイ……… 貞「和女さんもマア便りに思ふ御亭主に無くなられて嘸御力落しだらう ぬい」モーク貞庵さん夫れを言つて下さるな悲しく成つて成りません、唯此上は天にも地にも便りに爲るは貴郎斗り 貞「けれども私に少し胸に落ちない事がある、六兵衛さんの言つたには姉を女房に持つて居て其姉が死んだに就て和女を貰つたと云つて居るが何うも然うらしい所が無い、何う云ふ譯で和女はそんな老人を亭主に持つたのだい、好い若い女がそんな年を老つた者を亭主に持つと云ふのは嘸不本意でありましたらう夫れ共和女さんが惚れて女房に成んなすつたが ぬい」ハイ夫れを思へば那の人が死んだからと云つて

別に歎く事もありませんが譬へ三日でも亭主に持つて見れば其所が人情、けれども夫れを思へば涙も止まりますと云ふは外の事でもありませんが何を御隠し申しませう、私は江戸麴町と云ふ所の生れ、父は乾物問屋で麴屋平右衛門と申し番頭手代も多く使つて何不足なく其日を暮して居りましたが見世に金藏と云ふ若い者がありましたして年齢は十九、妾が心得違ひにも其金藏に思ひを掛け父母の目棲を忍んで首尾して居る内悪事千里の譬へ早晩此事がバツと評判、父の耳に這入り、其所で金藏は永の御暇、私は根岸と申す所の叔父の家に預けられ身動きも出来ず、其所に月日を送つて居る内或夜金藏が忍んで参り妾に申すには私の實家は肥前長崎に居つて當時は薬種渡世をいたして居りますから其家へ一旦戻ります、御縁があつたら又御目に掛りますると云ふ情け無い言葉マア待つてと袖に縫る内ハヤ

金藏は何所からか逃げて仕舞ひましたから妾は悲しさをやるせも無く、三日斗
 りは泣伏して居りましたが遂其所が若氣の至り、叔父の金子を掴み出し、フ
 ラフラ根岸の家を迷ひ出でまして身は汚なき順禮姿と成り漸く二年の月
 日を経まして漸く九州と云ふ所へ着きましたのは昨年の春、二十の年に家
 を出で廿一に漸く九州へ着きましてヤレ嬉しや一日も早く長崎とやらへ参ら
 うと少し無理な道を歩き、夜る道を踏迷ひ東西も知れぬ所へ分入り途方に
 暮れて居りますと向ふに一軒の家が見えますから其燈火を目的に尋ねて参り
 ましたのが先日亡くなりました那の六兵衛の家次第を明かして頼みますと大
 層深切に爲て呉れます故世に人鬼は無いものだと大層に悦んで厄介に成
 りますと六兵衛の申しますには何を隠さう、實は私には人買だ、人の娘を
 さらつて女郎屋へ賣るのが渡世だけれども和女は何うも賣るのも可愛さうだ

依つて私の女房に成れと斯う申します 貞「成程………」
 ぬい「私は大き
 に驚いて扱ては腹に巧みのあつて深切にして呉れた事が、夫れと知つた事な
 れば斯んな家へ來るのでは無かつたつけ飛んだ所へ傾つて來たとは思ひまし
 たが今更悔いても詮無きこと、左様なれば貴郎の女房に成りませうと綺麗
 に承知をいたしました 貞「奈是………」
 ぬい「女房に成つたら氣を許し
 ませう其隙を窺つて逃げやうと云ふ考へ 貞「成程夫れから何う爲ました
 ぬい「スルと六兵衛は大層に悦びまして夫れからは妾を下へも置かず大切
 にして呉れましたがなか／＼油断の無い男で私に留守居と云ふ事を爲して
 出た事がありますん何所へ行くにも必ず一緒に連れて参りますから妾が
 逃げる事も出來ず、心ならずも遂一日々々と夫婦に成つて居りました
 貞「夫りやア然うだらう那んなカルメラ髪髻な面を爲て居て和女のやうな美

くしい女を女房にすれば夫りやア離す事の出来ないのは道理至極……
 めい「其所で今度も少し京都へ賣りに行く者があるから一緒に駆けと斯う
 云ひますから何所かの娘と二人連れで京都へ賣りに参り、お金子に替へて其
 歸り道に御目に掛つたのは貴郎引續いて亡くなりましたが唯餘りに深切に爲
 て呉れましたから何と無く氣の毒に存じまして悪い奴ではあります但途涙
 も出ましたがナニ夫れを思へば可愛想な事もございませぬ、思へば今頃は江
 戸の阿父さん阿母さんは何う爲たか金藏は何う爲て居りますか、妾程果敢無
 い者はございませぬ」と又も涙に暮れる、一伍一什を聞きました貞庵が
 貞「然うだらう人買の女房に爲ちやア品格と云ひ應待と云ひ何所か氣高い
 處があると思つて居りましたが扱ては江戸の大商人の御娘子でありまし
 たか夫りやアママ御氣の毒……是れから江戸へ行くと云つてもなか〜大

變、私が長崎とやらへ往つて其金藏と云ふ人に逢はして進ませうぬい
 貴郎逢はして下さいますか、貞「屹度逢はして進める就ちアおぬいさん
 和女に少し頼みがある、抑も和女に加古川で逢つた其日から、好い女
 だ、男と生れた甲斐にやア、云ふ女を女房に爲て見たいと思ひこみ和
 女には惚れ込んだのだが如何にせん和女は亭主持ち、今迄は謹んで居りま
 したが今様子を聞けば心から惚れて持つた亭主でも無い様子、聞いてやつと
 安心を爲しました、コレおぬいさん、和女も親を捨て、何百里と云ふ遠い所へ
 男を尋ねて来やうと云ふ精神、萬更處女でも無い、必ず私が其金藏
 と云ふ人に逢はして進げる程に私の云ふ事をウソと云つて聞いて呉んなさ
 らないか」と聞いて大きに驚きまして、ぬい「アレ又しても〜、然んな事
 斗り被仰る方斗り、深切〜かして、妾を皆んなで慰さもうと云ふ御了見

真「イヤ決て和女を慰さもう杯と云ふ精心では無いのだ、和女にぞつこん惚れた私、萬更憎くもありません、サア私の云ふ事を聞いて貰はにやア成らん夫れとも何うあつても聞く事が出来ねへと云やア氣の毒だが私は和女の命は貰う、サア夫れでも嫌か、ぬい「別に嫌と云ふ事はありません何うせ汚れた此身体故決して辭みはいたしません、真「サア嫌で無けりやアウ」と云つて貰ひませう、ぬい「ホソに詮方の無い人、夫れじやア好うございませう、和郎さんの云ふ事を聞きませう、真「ナニ聞く其奴ア有難へ……ぬい「時に真庵さん、和郎は眞實に太宰府迄お出でなさるのであります、真「イヤ別に往つた所が是れと云ふ目的も無し、又、弟が居るか何んだか知れやア爲ねへ國に居る事が出来ねへから九州へでも往つて見やうと云ふ精神で此方へ來たのさ、ナニ行かなくつても好い、ぬい「何んだか目的に成ら

ない言葉……じやア兎に角妾の家へ往つたら好うございませう、真「夫れじやア和女の所へ入夫に成つて別に醫者と云つても身拵も無いから爲ることは出来ず、六兵衛さんの眞似をして相變らず其人買さ云ふ家業をやつて見やうか、ぬい「和郎さんが然う云ふ心ならマア當分人買でも御遣んなさい、私が教へて進ませう、然し夫れも一遍こつきり永く遣る商賣ではありませんから、真「夫りやア勿論の事」と大家の娘と雖へども朱に交はれば赤く成る心から悪い心では無いが此所で相談一決して先づ金藏に逢はせると云ふのを種として旨々こ手に入れて先づ夫婦同様此所で九州へ遣入りまして小倉へ着き兩人で暮して居たが何爲る真庵は悪い奴と云つても根が醫者でありますから未だ然う悪い事に抜目が無いとは云はれない、おぬいも未だ廿三心からは是れとても是れで喰はうと云ふ考へで無いから毎日々々兩人は爲

す事も無く遊んで居る内に坐して喰へば山をも空し、米屋、酒屋、薪屋、薪屋は無いけれども其所邊中へ借金を拵へて首が廻らなくなつて仕舞ひました。真「おぬい、ぬい」ハイ……真「何にか好い金子儲けは無
いかなア、ぬい」妾も然う思つて居るけれども別に是れと云ふ目的も無いから何う爲やうかと思つて居るんだヨ。真「乃公ア詮方が無へから此處を夜逃げを爲やうと思ふ、未だ此處へ來てから女を二人も賣りやア爲ない詮方が無へ」と此所で又夜逃げと相談をして夜家財道具を纏めて遂々此所を出奔いたしました。今日も今日とて家業、上の事で近村迄参り其歸り途斗らず籠駕屋の狼藉を見まして中へ飛んで参り、二人の者を追散して。真「好い娘だ、此奴ア金儲けが飛込んで來た」と其顔熱くぐぐと見てあれば這は抑も如何に己

れが京都三條に居りましたる頃屢々出入りいたしたる岡崎村の矢部鞆負の娘でありますから大きに驚きました、然し向ふでは妾が變つて居るから知らない。真「時にマア好い鹽梅でございましてが此れから何處へお出でなさるので……深雪「妾は京都の下河原まで参ります。真「オヨ……元談云つちやア不可ません此所は筑前でげす……是れから京都と來た日にやア大變でございます、私には大坂迄商費用で参りますから大坂まで送つて往つて上げませう、大坂から十三里、直ぐに一番で京都へ行けば直き着きますから。深雪「ハイ有難ふ存じます、切望お連れ下さいますし、先方へ参りますれば必ず御禮をいたします。真「イヤ其お禮には及びません、人間は相見互ひ何うも此年を取りますと物事が深切に成ります、ヤア此直き先きに私の家がありますから一先づ此方へお出でなさい。深雪「ハイ有難ふ

存じます』と深雪は落る涙を振拂ひまして彼の貞庵の跡へ尾て行く己れが身に降掛る大難のあるそとは神ならぬ身の知る由も無く實に氣の毒千萬でございませす……。

○第十八席

深雪貞庵に助けられて危く悪漢何事か荐りに密談す

エ、深雪は貞庵とは知らず、又人買とも存じません、世にも深切な人があればあるものだと斯う思つて悲しき中に悦ばしく地獄で佛とは此事であらうと跡へ尾て参りますと凡そ八町斗り、向ふに一軒の家がありました貞お娘子那れが私の家だ、那れへ往つてマア、悠然御休みなさい深雪『ハイ有難う存じます』と云ふ 貞『ナイ今歸つたヨ』一人の女がバタ／＼ぬい『チヤ和女さん何う爲たい 貞』今此姉さんを御助け申して

来た、何う云ふ理由だか知られへが駕籠屋二人にモ一少して肌を汚される所であつた、出精前の好い御娘子が那んな者に肌を汚されちやア出精の妨げに成る、女は女同士だから和女マア心配を爲ないやうに能く慰さめてお呉れぬい『ア、好うございませす……モ一姐さん御心配なさるな大丈夫ですヨ、那れは私の親父でございませす 深雪』始まして御目に掛りまする、貴郎の御亭主さんに今日は飛んだ御世話に成りまして何供御禮の申そうやうもございません、切望宜しう願ひませす ぬい『イエモ一行届きませんで那の人は人に深切を掛けるのが道樂でありまして決して御心配をなさるには及びません 深雪』難有たう存じます』貞庵が 貞『おぬい困つた事を爲たなア ぬい』何か…… 貞』何にかじやア無い、是れから大坂へ行くと云ふのだが關所を通る手形に同行二人としてある、此御娘子が這入

つて同行三人と成ると面倒だが……イ、ヤノ、二の字の頭へ一を入れ
てやれ、モシ見付つて御處刑に成つた所が三日も止められりやア夫れで好
いんだ、殿しく締りも爲めへ」其以前には此邊に關所があつた事と見えます
貞「明日立つから其仕度を爲るが好い、ぬい」ハア宜しうございます、貞
乃公は今日は鳥渡友達の所へ用があつて往つて来るから……(小聲)逃
がされえや、に能く心を配つてと(大きな聲)決して御心配の無いやうに御慰
さめ申して呉れ、ぬい「畏まりました」貞庵は仕度をいたして福岡の城下
に鍵屋善兵衛と云ふ宿屋があります、此家へ娼妓を買出しに来て居るのが攝
津福原の遊女屋桔梗屋七兵衛の手代であります、兼て貞庵に好い玉があるな
らばと云ふ話してありますから此所へ尋ねて参りまして、貞「今日は……」
善「チヤ此りやア貞藏さん(貞庵では不可ないと云ふので此頃では貞藏と云

ふ)何にか用かい、貞「桔梗屋の番頭さんが居りますか、善「ハアお出で
なさいます……コレ誰か桔梗屋さんの御座敷へ御案内を申しな、女「畏ま
りました」と案内を爲る、貞「今日は、番「イヤ、貞藏さん、貞「先日は御
馳走に相成りました、番「何ういたしまして扱て好い玉がありましたか、
貞「好い玉にも何んにも世界飛切生一品と云ふ品物が出ましたせ、番「へエ
、其奴ア豪氣だ、如何歳だい、貞「廿二ばかりでございますが其美しくしい事
と往つたらマア御聞なさい、形容して是れを云へば、沈魚落雁羞花閉月、
嬋妍窈窕、雨に惱める海棠か、露に痛める櫻花、芙蓉の花も將に耻ぢ
ん斗りなり、番「チイ、貞藏さん、私にやア何を云つて居るんだか少つと
も譯が分らない、貞「マア夫りやア素晴らしいものでございます就ちやア私
が好い子成に依て傍から救つて連れて來たんでげすから何所迄も其手で優し

く和郎さんの手へ渡されへと途中で心配でございませうから明日の朝早く御存
 じの地藏ヶ谷へ出迎て来て下さいまし、私が噂アに命令けて其所まで落して
 差上げますから番「ハア宜しい所て直段は……」 貞「マア玉ア見て直
 を極めて下さいまし、夫りやア素晴らしい者でございませうから番「では明
 日の朝暗い内に地藏ヶ谷で御待ち申して居りますから 貞「何分願ひます、
 左様なら」と其所を出て家へ歸つて来て 貞「おぬいぬい」何んです
 貞「那の一日逢つた桔梗屋の手代なアぬい」ハア 貞「那所へ賣る約束
 を爲て来たから和女が計ひで那の娘に向つて實は良人は人買と云つて人
 の娘を女郎に賣る商賣だ、和女さんもグズグズして居ると大坂へ往つて
 女郎に賣られて仕舞ふから妾が密と落して進げるから御逃げなさいと云つ
 て明日の朝暗い内に那の娘を逃がして呉れ、途中で乃公が待受けて居て恩

を仇で返すと云ふ所をトツコに取つて那奴を毆打る、其所へ桔梗屋の手代
 が出て来て仲裁を爲ると云ふやうな事に爲るから和女の口で頼むヨぬい」
 夫りやう御願ひだから止してお呉れ、那の娘の身の上を段々聞いて見るに
 恰好妾が江戸から逃げて来たのと同じ身の上、唯モ途中で深切にして
 呉れる人があれば夫れを神なり、佛なりと思つて便りに爲る心細い身の上、
 亭主に知れず間男を爲たとか情夫の爲に親を棄てるとか云ふ不所存者であり
 ますなら近頃の妾故決て嫌とは云はない、必ず御手傳ひ申しますが那の娘
 の身の上は實に可愛想。初めから目に這入らない、夢に見たと締めれば那
 の子一人位に目を注げないからと云つて又好い仕事もありませう、切望妾
 が代つて謝罪る程に勘辨してやつて下され」と慈悲の籠つた女房の言葉、
 慾に目の暮れたる貞藏固より錢に困つて大恩受けたる師匠の家の物を持つ

て逃げ、大坂で泥坊を働き損なつた程の不所存者でありますから何んで勘
 辨いたしませう。真「籠棒奴エ盗ッ人が情け心を出すやうじやアモ一老込
 みだ、乃公達の商賈が情け心を出すやうじやア又老込みだ喰ふや喰はすの
 界、然んな事を云つて居られねへ場合だに由つておぬい切望汝エの了見で
 何んとか好いやうに云つて落して呉れ」おぬいは暫く考へて居りました
 が、ぬい「眞當に和郎さんは情け杯と云ふ事は薬に爲たくも少しも無いこ
 と、妾が和郎のやうな者を一日でも亭主に持つたのが此方の謝罪り、毒を喰
 へば皿までとやら、宜うございます、旨く私に説付けて明日の朝逃がしま
 せう。真「然うして呉れ御願ひだから……」ぬい「何方へ落そうねへ」
 真「然うさ地藏ヶ谷とここの約束をして来た。ぬい「然うかい宜しうございま
 す、じやア斯うして下さい、地藏ヶ谷へ行く道々の曲リッ角の曲る方の角の

木へ紙を縛つて置いて下さい、右へ曲がる所は右の方の角へ、左りへ曲がる方
 は左りの角へ紙で印しを付けて置いて下さい。真「成程、此奴ア好い工夫だ、
 何んに爲ても金子を儲けるには骨が折れるとつぶやきく又もや出て行く。

○第十九席

貞庵深雪を苦む
 深雪福原に賣らる

次の間には深雪、左様な事とは存じませんから疲れて居るだらうからと敷て
 呉れましたる床の上へ座り過ぎ越方を思案して居りましたが何を思つたかホ
 ロリと落す一ト竿、深雪「誠に阿父さん、母様、不孝の罪は御許し下し置か
 れまし、母上の胎内を出でしより今日まで一方ならぬ御恩の條、海より深く
 山より高く然るに針程の御恩送りもいたさずして父母の仰せに背き、家出い
 たしました不孝の大罪、嗚や今頃は母上は御心配遊ばされて居らせられる

であらう、日頃可愛がつて下された母上、妾の床が空に成つて居つたを御覽遊ばしたなれば狂氣なされはいたさぬか、ア、不孝の罪御許し遊ばして下され」と西に向つて合掌爲て居りましたが、深雪「何れ其内には野尻先生の方から改めて使者が参るでございませう、夫れに就けても野尻様今頃は如何遊ばして居らせらるゝであらう、無事に御暮し遊ばして居らせられるか如何なすつて居られうか」と一ツは親を思ひ一ツは野尻を思ひ、又行末越方を考へて居る所へガラリと唐紙を明けて這入て来たおぬいが、ぬい「姐さん、深雪「ハイ」と涙を見せまいと思つて向ふを向て袖で涙を押拭い、深雪「何んぞ御用でありますか、ぬい「和女さんは那の人を何んだと思つてお出でなさる、深雪「御深切の御方危い所を御助け下しおかれまして、ぬい「イ、エ助けたのじやアありません、又妾の眞實の亭主でもあ

りません、先刻も鳥渡お話しをした通り私も相當の者の娘、那の様な人を誰が亭主に持つものではございません、那の人に助けられたのは和女さんの大不運、和女さんが深水へ這入る斗り那の人は人買でございませうヨ、深雪「人買と申しますと何んでございませう、ぬい「私はモ一何うせ詮方がありません野に出した死人同然、遣らばやらしやれ青空の下と斯う覺悟を極めて居りますから那の様な人を亭主に持つて心にも無い月日を送つて居りますか、人買と云ふのは女をさらつて往つて遊女に賣つて金子に爲やうと云ふ、深雪「エツ……夫れは大變……、ぬい「アア那の人は人買の眞藏と云つて九州邊では名の高い悪者でございませう、深雪「マアド……ド……何う爲たら好うございませう、ぬい「世の諺に同病相憐れむとか申しますから、決して御心配なさいませう、必す私が御助け申すでございませう、

深雪「何う爲たら好うございませう」と深雪はナド／＼震つて居る。ぬい「和女さん勘付いた積りじやア悪うございますから知らぬ顔をしてお出でなさい。必ず今晚私が御助け申して進げますから。深雪「斯う成りましてはモ一便りに爲る方は貴女御一人。切望宜しう御救ひ下し置かれますやう妾は唯今迄世間知らずに育ちました。何んで其様な遊女勤めが出来ませう。ぬい「好うございます。決て御心配をなさいませう。と色々に慰めまして安心を爲るやうにいたし四方山の話した爲て態と氣を慰めさせて居る内に冬の日足の短かくハヤれぐらを急ぐ鳥の聲、日は西山に傾きましたからおぬいは燈火を付けまして夕飯の仕度を爲て居る所へ歸つて来たのは人買貞藏。貞「今歸つたヨ。ぬい「チヤ大層に遅かつたねエ、何所へ往つて来ました。貞「ナニヨ、又明日大坂へ往けば當分は皆んなの所へも無沙汰に

成るから鳥渡暇乞を爲て来たのさ、スルと那方へ往つても一杯。此方へ往つても一杯。方々で御馳走に成つて来て大變に酔つて仕舞つた。ぬい「然う夫りやア好かつたこと、大方前祝………。貞「ナニ………。ぬい「イエ此方の事さ。貞「腹が減つた飯を一杯喰ひていものだ御嬢さんに御飯を進けたか。ぬい「然んな事を、催促爲なくつても好いヨ、今其仕度を爲て居る所だヨ。貞「然うか、御臺様に劍突を喰ふ杯は餘り好いものじやア無へ、早く爲る／＼と御飯を喰へまして充分に酔つた振を爲て。貞「サア又明日は朝が早いからモ一寝ると爲やう。ぬい「然うだね………サア姐さん嘸御勞れでございませう。悠然今晚は御休み遊ばせ又明日が早うございますから。深雪「ハイ有難う存じます、色々と御厄介に成つて済みません、然んなら御免を蒙ります」と深雪は次の間へ這入つて床の内へ横に成りましたがサ

ア寝ることが出来ない 深雪『お内儀さんがア、は云つて御吳んなさつたが
 何う爲て助けて下さる事か、モシ寝忘れてもなすつたら此儘夜を明かして那
 の怖い人の手に曳て行かれなければ成らない、斯う云ふ苦勞を爲るのも皆
 んな是れば親を棄てたる所の罰であるか思へば、情けない身の上であり
 ける』と今日此頃は涙に最ど濕り勝ち枕も露にしたさんばかりでございま
 す、内に山寺に響く鐘の音はハヤハツも過ぎて深々寂寞たる所の有様、
 木枯の風の音のみ物凄くサーツサツと云ふ音、此時次の間からミシリク
 と人目を忍んで這入つて来たのは例のおぬい密と唐紙を明けまして
 お嬢さん、モ一夜明に程もありませぬ、然し其御身拵では人の目に立つて成
 りませんから此りあア妾の着物、垢は付いては居ませんから 深雪『誠に
 有難う存じまする ぬい』サア〜人目に掛らない内に此方へ入つとやいま

し 深雪『ハイ……』と云ふ返辭さへも聲うるみ、おぬいは深雪の手を取
 つて密と草履を穿かせて裏の戸を明け、戸外へ出るとモ一明方近く空に輝
 やく星の光り何と無く物凄く 深雪『ホツ……』と一ツ息吐いて有難う存
 じまする此御恩は生々世々決して忘却はいたしません ぬい『アノ貴女の
 曲がる方の横町の角々へ紙を縛つて置きましたから其紙のある方へ方へと
 御出でなさい然う爲れば本街道へ出ますから其内には夜も明けませうに由
 つて、而して人が聞まして京都まで行くと云ふと人に足許を見られますか
 ら 深雪『ハイ……』 ぬい『周防の三田尻と云ふ所へ行くと斯う被仰つ
 い……三田尻へ往つて船へ乗ると大坂へ直き着きます、大坂へ上がつたら
 ば夫れから十三里、夫れからは飲まず喰はずに往つたつて直き行ける位い、
 駕籠へでも馬へでも乗つて賃錢を拂つてやれば参りますから決して御忘れなさ

るなヨ、周防の三田尻……… 深雪『ハイ誠に御禮の申上げやうもございません聽て私も首尾克く大坂へ就きますと必ず御禮をいたします、是れはホンの心斗りでございます』と差して居る管差を取つておぬいに呉れました何れ御縁があつたら又御目に掛ります。ぬい『此りやア結構な御品を有難う存じます』と心細も深雪は此所で彼のおぬいと云へる婦人に別れまして 深雪『ア一人に鬼は無いものだ、有難う存じます』と涙を流して手を合はせ汚なき所の草履を穿て教へられた通り來て見ると成程角々に紙が縛り付けてあるから其紙の方へくと曲つて一生懸命に來ります内にハヤ夜はホノノと明渡つて來た 深雪『ヤレ嬉しや』と勇んで行くこと五六町、然るに樹蔭の石の上に腰ドツカリと打掛けて脂下りに煙草をパグーリくと飲んで居ります大の男、是れ別人ならず彼の人買貞藏でございま

す 貞『チイ〜〜〜姐さん 深雪『ハイ………チャツ貴郎は……… 貞』チ、乃公だ何所へ行くんだ 深雪『アレ飛んだ所で御目に掛りました』とパタ〜〜と逃出そうと爲る奴を馳けて來て突然左りの方の手首を押へ 貞『エ、何にをするんだ然んな事で味く逃げられるやうな盲碌を爲た乃公じやア無へや、何んでもおぬいの様子が可笑いから此りやあ女は女同士の事だに由つて次第に由つたら逃がしやア爲れへかと乃公は先廻りを爲て道を變て此通り先へ廻つて來て待つて居たのだ、アモ勘辨が出來れへ、今は何をかく隠そう實ア乃公は人買だ、始めて和女を見た時にチラリと白眼み、ア、一好い女だ世にも稀なる素腹しい女中、此奴ウニ番餌にして好い金子儲けをしやうと斯う覺悟を極め、深切こがして連れて來て福德の三年目、好い正月が出來ると悦んだ甲斐も無やおぬいの奴が此有様、又汝エも恩を仇で返す

やうな奴ならモ一勘辨が出来ねへからサア来い…… 深雪『ハイ』モ
 「存命たる心地は有りません、何んと爲たらは好からう……と思ひ深雪
 誠に恐れ入りました私には…… 貞『エ、グズグズ』云ふな、サ斯う成
 れば又一ツ汝エに聞かしてやる事がある、深雪和女は少つとも知るめへが乃
 公は和女を知つてるぞ京都岡崎村に汝の親父の矢部靱負が浪人して居た
 そのときちか其時に近しく出入りを爲て居つたる三條に居た醫者の貞庵和女の庇陰で那の
 京都に居る事が出来なく成り遂々京都を隨徳寺、送夫れから色々と旨へ
 家業を考へたが何うも濡手で粟の掴み取りの様な事は無へ、朱に交はれば
 赤くなる、段々悪い方に足を入れ、今じゃア憚かりの無へ人買商賣、萬
 更赤の他人でも無へに由つて汝エは乃公が思ふやうに爲るから然う思へ
 深雪『チャ……』扱ては和郎は野尻先生の所に居られたる貞庵 貞其貞

庵も此通り水の流れと人の末分られへものだ、グズグズ云うな譬へ以前は出
 入先の御得意様の御嬢さんでも今じゃア乃公は命を助けてやつた恩人だ此
 人非人め 深雪切望御免遊ばして……切望御免遊ばして……』と云ふ
 心に染まぬ縁談に親を棄てたる天の罰、女でこそあれ三千五百石の矢部靱
 負の娘、此場に至つて人買の手に掛り憂目を見ることか、是れと云ふも妾が
 運の拙なき所と胸は一杯、先立つものは涙ばかり、唯差俯向て居りまする
 貞庵拳を上げていま毆打らんと致したる時にバタ／＼と馳けて来た一
 人の男、四十格恰の商人風の男であります 男『モシ／＼和郎さん何と
 なさいます 貞何ななさるとは餘計なこと、此りやア私の娘で勝手に情
 夫を拵へて親を棄てちやア表へ斗り出て居やアがつて餘りと云へば親を踏付
 けに爲た致し方モ一勘辨が出来ねへ打棄つて置てお呉んなせへ 男』

イエ然うでもございませうが然し御自分の娘だからと申して然う無暗に毆打
 つて濟むものではございませんマア、勘辨爲て下さいまし 貞「エ、打棄
 て置てお呉んなせへ、黙つて居るい、汝エの知つた事じやア無へ方々猿眼
 に成つて探して居た所だ、今此所で發見たのが百年目、モ一少して玉無しに
 爲る所であつた 男「マア、何にかは知らんが心細い娘を打つたり叩
 いたり爲たつて詮方が無い、萬一打殺しても爲た時には大變でございます、
 然れこそ貴郎玉無しじやアございませんか 貞「エ、死なうとくたばらうと
 好うございますモ一斯う根生の腐つた女は手許へ置たつて見込みがあり
 ませんから年一杯に叩き賣つて仕舞う積りでございます、女郎にでも叩き賣
 つて小使錢にでも爲なくつちやア腹が癒へません 男「夫じやア、和郎さ
 ん此娘を御賣んなさる積りでございますか 貞「エ、何うせ見込みがあり

ませんから女郎に叩き賣つて仕舞うんです 男「成程、夫れでは私に此娘
 子を賣つちやア下さいませいか是れから女郎に成れば源平藤橘四姓に肌
 を觸れる苦海と云ふ位いだ、誠に賣る積りなら私が買ひませう私は播州姫
 路の者で先立つて一人の娘が死にまして母親が日々クヨクとして寝て斗り
 居りますから其娘に此娘子が似た所がありますに由つて私が買ひませう
 貞「夫りやア何うも有難う存じます、夫れじやア何所で賣るのも同じことで
 ございますから賣りませう 甲「如何程で…… 貞「左様さ男のがきと
 は違つて女の子供はヤ一頭の物だ、衣類だと掛つて居ますから五十兩なら賣
 りませう 男「五十兩は少つと高くはありませんか四十兩では如何で……
 貞「好うございます、固より夫れで商法に爲やうと云ふ譯じやア無し御賣
 り申しませう 男「夫りやル何うも有難う存じます…… 貞「ヤイ娘汝エ

は仕合せ者だ女郎に叩き賢る所を此御方の爲に樂に此世か送れるんだ有難へ
 と思つて親孝行を爲る、大きく成つて好い亭主を持つて御恩返しを爲なくつ
 ちやア成られへ」と四十両の金子を受取つて泣入る所、深雪を那方へ渡す、
 所へバタ／＼馳けて来た所のおぬい、ぬい「和郎さん何う爲たい、真
 ウム旨く往つた途々四十両で賣り飛ばしたヨ、ぬい「然うかい夫りやア好い
 事を爲たれへ」と悦ぶ固は大家の娘と雖も悪い奴と交はれば斯くの有
 様買つた人は誰だと云ふと前回述べましたる所の攝州福原の遊女屋結
 梗屋の手代でございます、馴れ合ひとは知らず世の中には御情け深い方があ
 るものだ、此う云ふお情け深い方なら那方へ往つて貰は斯様／＼と理由を明
 かした事なれば京都へ連れて往つて下さらない事も無いだらうと斯う覺悟
 を極めまして彼の男と共に尾て参りました、遂に福原へ連れて参られました

四十両で買つた／＼と云ふのを恩に掛けて勤め奉公を爲せやうと云ふのを女
 房の情けに由つて此所を逃げて京都へ参る是れは後のお物語り、貞藏おぬ
 いは四十両の金子を受取り莞爾笑つて手代深雪の跡を見送つて居る此有様
 を傍への木陰に居つて見て居た一人の曲者があります、何う云ふ事に成るか
 次席に……。

○第二十席

悪漢の末路憐むべく
 幽魂飛んで跡もなし

エ、此所一席は貞藏おぬいが因果應報と云ふ所を一席序でながら辨じて
 置きます、扱て貞藏おぬいは急ぎ足で宅へ歸つて参りまして、真「ヤいおぬ
 い酒一杯付けろ、ぬい「未だ早いじやア無いか、真「朝つから飲まうと夫
 れだけの稼ぎを爲れば詮方が無へ一杯飲まう、久し振りで四十両耳を揃へ

た山吹色、何時見ても悪く無へなア
 やうだが未だ家に居る時は二百や三百のお金子は目脂ぐらいに思つて居たが
 しがない暮しの今日此頃四十兩と云ふお金子を見るに何んだか大變なお金
 子を掴んだやうな心持が爲る、マア好い事を爲ました
 眞和女も一杯飲
 みねへ、ぬい「ハア一杯飲みませう、何んだか娘の涙を飲むやうな心
 持が仕て旨く無いヨ 眞白痴ア云へ、未だ然んな度胸じやア好い金子儲け
 は出来れへぜ」と夫婦好からぬ金子を得て機嫌宜く飲んで居る此所に程遠か
 らぬ所に山田村と云ふ村があります、其村に吉藏と云つて酒と博奕と女郎
 買三道樂揃つて居る大變者、常に悪い事の謀計をして居る奴に平吉と云
 つて今日も平吉の宅へやつて参り 吉「ナイ平の字は居るか 平「チー誰だ
 と思つたら和郎は吉か 吉「ウム吉だ 平「何か好い儲け口は無へか 吉「

其儲け口で来たんだが…… 吉「ウム何んだ 吉「實はなア平公乃公が
 昨夜畦倉村の常福寺に好いのが出来て居ると云ふから少し金子を算段し
 て出掛けて往つたなヨ 平「ウムー 吉「スルてへと和郎何う云ふものか長
 と云ふと半が出やアがつて半と張りヤア長と出ヤアがる、途々五三六
 五揃の長で取られて仕舞つた 平「チャ、夫りやア氣の毒千萬の事だ
 吉「マア口悔を云ふ事は黙つて聞け…… 夫れから和郎今朝スツテンテレッ
 クに成つて平井村の石地藏の所まで来ると娘を頼りに毆打つて居る奴が
 あるのヨ 平「へエー 吉「誰だらうと思つて見ると人買の貞藏じヤア無へ
 か 平「へエー何所の娘だ 吉「何んでもマア落人だな、身拵は好く無か
 つたが餘つ程好い娘だつた、何う爲やアがるか餘まり酷い事を爲たら一番
 出て娘を助けてやらうと思つて居ると其所へ人が一人來やアがつて賣つて

臭れと斯ふ云ふんだ 平「ウム 吉「貞藏め自分の娘だと吐しやアがつた
 が那奴に 娘は無かつたなア 平「娘どころじやア無へ、若い女房だ、全
 体何う仕やアがつたのたろう 吉「スルと和郎遂々談判の末四十両で賣
 渡しやアがつたが旨く爲やアがつたじやア無へか 平「成程 吉「デマア乃
 公は和郎の所へ相談に来たんだが何んと那の金子を巻上げる工夫はあるめ
 へか 平「然うヨ巻上げる工夫と云つらやア何う爲ても奴等夫婦を殺害すよ
 り外に道はあるめへヨ 吉「然うかなア何うだ半口乗られへか 平「此方で
 頼まうと思つて居た所だ乃公が荒ごなしを爲るから和郎跡片付けを仕て呉
 んねへ、金子は山分けに仕て呉れるだらうな 吉「夫りやア和郎狡猾だ、ネ
 タア揚げて来て其所へ往つて手傳つて夫れで山分けは酷からうせ、分られへ
 事は云われへ和郎に十五両やらう夫れで勘辨爲るい 平「十五両か……

……好いやマア……其工夫は斯様々々と何にか耳に口を寄せて居たが 吉「
 ウム成程、じやア晩に来るヨ四ツ過ぎが好からう 平「成丈け更けた方が好
 い』此所で何にやら相談をいたして吉藏は立歸りましたが何れ好い工夫では
 あるまい、扱て貞藏おぬいの 兩人は散々に久し振りで大金を得て……其
 頃の四十両は唯今で云ふ四百両……其悦びに大酒を過ごし一日を終
 つて夫婦互ひに眠りに就きましたが夜も次第々々に更けて山寺の鐘皓々告
 渡り水の流れも止まる丑三ツの頃裏口をガチリ／＼とこじ明けて忍び込ん
 だる二人の曲者、一人は吉藏一人は平吉でございます覆面で面を隠し奥へ
 這入つて来て見ると夫婦は好い心持で寝て居りまする、平吉刀ア抜て貞
 藏の頬つべたをヒシーリ 貞「アツ……』と云つて目を覺して見ると二人
 の大の男が立つて居るから驚いて 貞「ア……貴郎方は誰方様でござ

います 平「誰方様も那方様もあるものか汝エの所に大金のあるのを知つて忍び込んで来た二人速かに金子を出して仕舞へ 貞「ッヨ………冗談御仰つちやア不可ません私 の家の様子を御覽なさいまし、別に是れと云ふ財産があるじやア無し大金は扱て置いて一分の金子もございませぬ、切望御勘辨なすつて下さいまし 平「へ、白痴ア云へ、乃公達の白眼んだ眼に違へは無へ、出せく極り文句のやうだがグズく云ふと命が無へぞ 貞「いエ決してございませぬ 吉「じやア云つて聞かしてやらう今朝汝エ達は好い稼ぎを爲たじやア無いか平井村の石地蔵の傍らで……… 貞「エツ……… 吉「サア其時乃公が踊り出して好い金子儲けを爲た半口載せて呉んなせへと云へば如何程か呉れるには違へ無へが四十の高の半分じやア詮方が無へ、由つて汝エ達の命を貰つても残らず取りに来たのだ、サア命を棄てても金

子が欲しいか何うだ 貞「へエ夫りやア大方人違ひでございませう………ノ 女房「ぬい「手前共に於きましては決して左様な事はございませぬ何卒此儘御歸りを……… 平「汝エ迄も然んな事を云やアがつて斯うして呉れる』と足を上げてボンと蹴る ぬい「アツ………」と云つて倒れる所へ貞藏は手早くも火鉢の間へ隠して置きました刀を抜くより早く 貞「ヤツ………』と云つて吉藏に切付けるヒラリ體を躲した吉藏が 吉「ヤ一己れ小癪な事をチ、殺害して仕舞はう 平「チ、合點だ』と平吉が貞藏の肩口へザツクリ切付ける 貞「ヤ一乃公を切つたな 吉「切られる様な事を爲るから切つたのだ翹り殺しに爲るから覺悟を爲る』と又も一太刀切込む途端に覆面が落ちる其顔を眺めておぬいが ぬい「ア一和郎は隣り村の吉藏さん 吉「エ、然う見られちやア不愍だが此方の身の大事だから和女の命も貰うから然う

思へ』と切付けんと爲る。ぬい『アレー』と馳出す奴を平吉猿轡を延ばして黒髪を押へ、ル／＼引摺つて来て。平『斯うして呉れる』と咽喉の邊りをプツ／＼ぬい『ロー……己れ妾をコ……殺したな。平』然うヨ不慰だが詮方が無へ』と又も切付けまして遂々兩人の息は相果ける。吉平吉好い鹽梅だつたなア。平『ウム旨く往つた金子は何所にあるだらう。吉』廣くも無へ此所の家だ探して知れねへ事はあるめへ』と那方此方を探すと蒲團の下から出た財布、重みを量れば確かに四十両。平『あつたあつた此所にあつた。吉』然うか、夫りやア好い鹽梅だ、サア出掛けやうと』兩人は金子をさらつて戶外へ出たが。平『待てヨ、未だ何にかあるだらう』と再び戻つて来て猶那方此方と探す内に火鉢の抽斗から一両、葛籠から二両、と合せた金子が六両三分、目星しい衣類を二三枚。平『行掛けの駄賃だ打棄つて

置けば上の不淨金に成つて仕舞う、此方へ取つて置けば何にかの足に成る。吉『成程和郎は悪い事には抜目が無へ男だなア。平』此位ゐに爲なくちやア世渡りは出来ねへ。吉』未だ残つて居る物があるぜ。平』何にか……吉』澤庵石が残つて居る。平』白痴に爲ちやア不可ねへ、サア出掛けやう爲て置けば早心に懸る山の葉も無しと云ふやうなものだ、サア出掛けやう』と遂に兩人は跡白浪と消失せましたが寶逆つて入れば又逆つて出づ、貞藏おぬいの兩人が斯る最期を遂げると云ふは是れ汝に出で、汝に歸る、自業自得で詮方がございません、悪い事を爲た終りは皆斯の如くであります、扱て深雪は福原へ參つて女房の情けに由り京都へ逃げ野尻の行衛分らぬと聞いて遂に發狂爲るのお話し。

○第二十一席

深雪漸く危難を免る
恩人悪鬼の爲に斃る

却説も深雪は彼の攝州福原なる遊女屋の手代に連れられ己れが深き穴に
落とされるとは露知らず、世にも有難き人があればあるものと心の内に伏
拜み段々と日敷を経て来りましたは福原の遊女屋、最初は宿屋だと云ひまし
たが遊女屋だ、深雪「ハテ變な所へ来たわい」と思つて居ると其晩は丁寧
にして寝かしましたが翌日の朝に成りますと當家の主人と云ふのが深雪を呼
びまして、主人「扱て和女は何んと云ふ名だ、深雪「ハイ、妾は深雪と申し
まして九州福岡の城主黒田衣紋之助の家來三千五百石矢部靱負と申す者
の娘でございまして浪人いたして京都に居りました時、京都下河原の野尻阿
蘇次郎と云ふ方に斗らす夫婦約束をいたしました然るに父が他に良人を見立

て其家へ嫁に行かれば成らぬ事に相成りました、去すれば野尻先生に如何に
も操が立ちませんに依つて親の家を抜出だし、京都へ往つて其野尻さんと
云ふ方に逢ひ色々御相談をいたさうと存じて家を抜出だしました途中既に
危うい所を御助け下すつて誠に有難う存じます京都へ参りまして其野尻
さんに逢つて四十両のお金子は御戻し申す事にいたしますからやつて下さい
主人「冗談云つちやア不可ねへ然う成つたらば和女は好い情夫の所へ行
くんだに由つて充分だらうけれども兼て和女も知つての通り四十両と云ふ大
金を出して買つたんだ、阿父さんから……」深雪「イ、エ那れば父ではご
ざいませぬ、主人「阿父さんで無ければ奈是其時に云はねへ、十兩以上を
大金と云つて九兩三分二朱盗んだつて、首は討たれねへ、けれども十兩取つ
たと云へば首が落ちる、然も四十兩と云ふ大金が出してある萬一夫れでも

行きたかつたらば四十兩の金子を井べて是れまで連れて来た途中の入用其儘勘定して京都へでも大坂へでも勝手に行くが好い 深雪「夫れは御無理と云ふものでもとく」妾が那の者か欺されましたのでございませうから唯今此所にお金子のある道理はございませう京都まで行けば何うにでも相成りますから切望京都まで御連れなされて下さいまし 主人「黙んなせへ京都々々と云ふけれども此所は攝州福原だ、山城の京都と云つちやア未だ一町や二町じやア無へ、和女の情夫だと云ふなれば手紙をやつたつて四十や五十の金子は何うにでも成るだらう、手紙をやつて取寄せなせへまし 深雪「イエ、夫れが然うは参りませんので手紙ではなが、先方で承知いたしました、妾が往つて自身に話しを爲なければ分りませぬので……」主人「然んな自由な譯には行かれへじやア、其四十兩だけ家に居て勤め奉公を爲なせ

へ、好い客でも付きやア一晚で和女の身受を爲て呉れる人もあれば一夜兼校奥様とも御新造とも云われるやうな身分に成るだらう」深雪は「喫驚驚いで、深雪「何ういたしまして妾の身体で男衆の前に出て源平藤橘四姓の枕を替す遊女が出来るものではございませぬ 主「勤めを爲ることが出来なけりやア四十兩の金子を耳を並べて返すが好い一生涯勤め奉公爲ると云ふ譯じやア無い、唯四十兩の金子だけ勤め奉公を爲ると云ふのじやア無へ四十兩だけ勤めると云ふのだ、何うでも斯うでも勤め奉公を爲るのが嫌だ四十兩の金子は返せれへと云へば地頭の無へ村は無い、上役人の所へ訴へて其成行を付けて貰はう、町人へ者は金子が賣だ、何んの見ず知らずの女に私が四十兩と云ふ金子を貸させる氣支ひは無い 深雪「御道理でもありませんが其四十兩の金子じやとて決して私が使つたと云ふ次第じ

ヤア無し、途中で那れ等のワナに懸つた次第、切望不憫と思召して御勘辨を願ひたう存じます。主私共が不憫だ、可愛想だと云ふ心持を起すやうじやア商賣を爲ることが出来ねへ、嫌なら嫌で此方に所存がある』と何んと云つても利かない、利かないと云ふのはもとく、悪い奴で前申す通り人買ぜげんと馴合ひで爲た事だに由つて承知爲ない、唯今では明治の有難さに然んな酷な事は出来なけれど昔時は女郎屋では占めると云つて物置見たいな所が出来て居て江戸は勿論何所の遊女屋にでもあつたもんです、今は金子を借りて稼ぎに行くのですから借金さへ返して仕舞へば出ることが出来る、其頃は譬へ賣る時は二十兩か三十兩で賣つてもイヤ身受けと成ると云ふと八百兩だ千兩が銀一文欠けても負けれない杯と(尤もお金子も懸ります)云つたもので随分壓制な頃でございました、其故勤めが辛い

と云つて首を絞つて死ぬ者もあれば大坂の花鳥の様に火を付ける者もある。那れは自分の情夫の梅津長門に逢ひたい斗りで火を付けた、何爲る品物が存命で居るに由つて六ヶ敷い好い男と逃げるのもあるし、勤めが辛いと云つて逃げるのがある又借金で堪らないと云つて逃げるのもある。病人で勤まらんと云つて逃げるのもある、少し御客でも取らないと云ふと主人が責める。夫れが苦しいと云つて逃げる者もある、去ればにや桔梗屋の主人は深雪を物置同様の所へ連れて来て梁から吊し、ろくく物も喰はせないで折々は背中を引擲いて。主「サア乃公の云ふ事を聞いて勤め奉公を爲るか四十兩の金子を返すか、何うだと云つては責める、併し深雪は譬へ骨をさいらに爲れやうとも勤め奉公を爲る氣はありませんに由つて唯返事も爲さず、下俯向て泣く斗り全つ切り喰はせなけりやア死んで仕舞ひますから鹽團飯の一ツや

二ツ折々には持つて来る、十四五日も斯の如くいたして居りましたが更に云ふ事を聞きませぬ他の女も可愛想だとは思ひますが邪慳な主人の事でございませぬから口を利いたり、物でも與へた事なれば己れが如何なる憂目を見るも斗り難く由つて御氣の毒とも何んとも慰さめて呉れる者が無い 深雪「ア、斯る苦勞を爲ると云ふも親々兩人が定めた熊澤次郎左衛門と云ふ夫を嫌ひ、野尻様に操を立てやうとして家出いたしました天道様の罰だ、モ一死ぬより外に詮方が無い、と何を持って來ても喰はない、死んで仕舞はうと覺悟をして仕舞つて……誠 に氣の毒なものでございませぬ、スルと此桔梗屋の女房におすゝと云ふ婦人がありまして 誠に情け深い人、似た者夫婦と云ふが當てには成らない明暮れ深雪の折檻されるのを見て すゝ「ア、氣の毒な事見れば西も東も知らない處女娘、屹度さらはれて來たに相

違無い、可愛さうな事であるが何う爲たらば好からう、とは云へうつかり爲た事を爲て良人に知れども爲ると妾の身體が何んな目に逢ふかも知れない、救つてやりたいが一人じやア仕方が無い』と考へて居る所へ這入つて來たのは船頭の和平と云ふ者 和「今日は…… すゝ「チヤ和平さん未だ出帆に成りませぬかね 和「エ、モ一明日の朝 出船に成ります、今日は御主人様には何うなさいました すゝ「ハア今鳥渡他出へ行きましたが……和「平さん和郎に少しお頼みがあるが聞いちやア呉れまいか 和「へエーお頼みと申すのは何う云ふ事でございませぬか、平生色々御厄介に成る私でゲスから何んでも聞きますが何う云ふ事でございませぬか、すゝ「外じやア無いが私の家の責場は是れ、斯う云ふ者が居ります、未だ能く身分は聞いちやア見ませぬが如何にも不憫で成らないから救つてやりたいと思ひませぬ、陸を逃が

せば必ず追手の爲に捕まりますから船で逃がした事なれば大坂へ行くまで
 決して人には知れまいと思ふ、切望一ツ骨を折つて妾が明日暗い内に救ひ出だ
 すに由つて船へ乗せて大坂まで連れて往つて遣つちやア下さいますまいか
 和成程、夫りやア好い思召し、願ふても無い幸い、事の事でゲスから早速承
 知いたしました宜しうございませす、私が深切に大坂迄送り届けてやりま
 せう、すい『届けて呉れるかい、けれども決して人に饒舌つて呉れちやア困り
 ます、和然んな事を云へば彼の邪慳な御主人貴女に何んな事を爲るかも知
 れません、宜うございませす、夫れじやア萬々御失策りなさるな』と爰で深雪
 を救ふべき手蔓が出来て和平は歸る、深雪は相變らず物置の内に愁然として
 居りましたが、恰好其夜は八ツ頃世間は寢鎮まつて深々として居る、深雪は
 永々の勞れが出来ましてウトウト爲て居る所へミシリ〜と廊下に足音が爲

る、深雪『今何んであらうか』と耳を引立てる内に戸をカラリと明けて
 女『姐さん〜』と呼ぶ者があるヒヨイと目を開いて見ると家の女房おす
 深雪『チャ貴女は御當家の御内儀さんじやアございませんか、すい『如
 何にも妾は此所の旅泊屋の内の家内でおす』と言ふ者であります、が嗚や今日
 迄妾が何んとか取爲しそつなものと怨んでお出で、あつたらう、なれど
 是れには深い仔細のあること、シテ和女さんが尋ねて行く京都下河原の何
 んとか云ふ人は和女の亭主かい、深雪『ハイ……別に祝言の盃を爲た譯
 ではありませんが斯う斯う斯様明石の風待の時に夫婦約束を爲ました、其方
 の被仰るには玉椿の八千代まで女房に持つは和女斗り、必ず私の方
 から沙汰を爲ると申しました、が沙汰を爲て呉れません、其内に親々が江戸
 表へ出まして妾の良人を熊澤次郎左衛門と取極めて呉れました、其家へ參

つては野尻先生に對して操が立ちませんから家出を爲て來ましたが斯う云ふ苦勞をいたすと云ふも親を棄てたる爵でございませぬ、モ一勤め奉公は出來ぬと覺悟いたして居ります、モ一死ぬより外に道はございませぬ、すい『女は女同志と云ふ事がある亭主が邪慳であらうとも今も云ふ通り何んとか私が爲さうなものだと思つてお出で、あつたらうが私の良人と云ふものは鬼の様な人で、私も元はかどわかした同様の目に逢つて當家に來まして夫れから主人の氣に入つて先妻が無くなつて私は後妻に成りました、良人に知れては大變、妾が何んな目に逢ふかも知れませんが、依つて良人に知れないやうに私がお逃がし申しますから御安心をなさい、聞いて深雪は飛立つばかり悦んだが身はいましめの自由にならない、すい『今に又私の良人の濱次郎が廻つて來るかも知れませんが、今は繩を解て進げる譯に不可ませぬ、八百石

積の大日丸と云ふ船の船長、和平と云ふ年は彼是れ五十斗り此人は二六時中家へて遊んで居ります、誠に慈悲深い御方ですから内々お話しを致した、が毎度のことで濱次郎でへ奴は憎い奴だ、知れると面倒だから知れないやうに明日の朝出帆を爲て大坂の川口へ着くから乃公が船へ載せて往つて遣らう陸を行けば追手が掛る船で行けば追手は掛らんと斯う云つて呉れました、夜の明方に私に忍んで來て助け出し、解船に載せて進げますから大日丸へお出でなさい』と親切に云はれて深雪は何んと禮の云ひやうも無く、深雪『何分宜しく御願ひ申します、すい『ハア宜うございませぬ、長物語りを爲て居つて良人に發見つては双方の爲に成らない、夫れじゃア明け方に來るか、待つてお出でなさい』と決て短氣な眞似を爲ては成りませぬから、深雪『ハア有難う存じます、其儘鈴と云ふ女房は往つて仕舞う、夢かと斗り悦

んで居ります、今にも東が白むかと云ふ所へ忍び來つたる女房おすい
 直ぐに繩を切解いて紙へ如何程かの金子を包んで……裸体じやア詮方が無
 いす『此着物を着てお出でなさい』と云つて先の着物と云ふのは彼の貞
 藏の女房に貰つた木綿の着物、是れは古びては居りますが紬の着物、帯を
 添へ細帯は勿論 す『サア小船が待つて居りますから』と福原の海岸へ
 連れて來て す『サア此船へ御乗んなさいまし 深雪』ハイ……ア……
 ……有難う存じます決て此御恩は忘れはいたしません、何れ御禮に す『イ
 、エ良人濱次郎の爲た事でありますから和女さんに御禮でも爲れると奈是逃
 がしたと云つて私は何んな目に逢うか知れませんか何れ御縁があれば都
 見物にでも往つた時に下河原で御目に懸りますから御禮手紙の一本でも遣
 して呉れては困ります其御心配は御無用でございますから』と直ぐに小船へ

の載せ沖の方へ船頭は漕で参りました、跡見送つておすいは す『ア、可愛
 想な娘である』と己れの身につまされて涙を流して居りました、同じ思ひ
 の深雪、言葉多きは品少なし、唯有難涙に暮れて小船の中でおすいの方
 を伏し拜み手を合して居る内にハヤ本船に着く、頃は夜はホノノと明渡り
 ました、此方はおすい、好い事を爲たと心の内で悦びながら桔梗屋へ戻つて
 來て見ると今主人の濱次郎は深雪が居ないと云ふので奉公人を起して其所
 等此所等を尋ねて居る大騒ぎの所へおすいが立戻つて來ましたに依つて大き
 に怪しみ 濱『コレおすい其方は何所へ往つて居たんだ、飛んだ事に成つた
 と思つたが す『ハイ小便所へ往つて居りました 濱』虚言を吐け今深雪
 が居ないに依つて小便所から其所等を残らず調べたが居やア爲なかつた、何
 所へ往つて居たんだ す『イ、エ全く……』 濱『其様な虚言を吐いたつ

て無益だ貴様ア深雪の身の上を不憫に思つて女は女同士、奴を逃がしたら
 う す『イ、エ貴郎が大金を出して抱へてお出でなすつた那の娘、何んで
 妾が其様な事をいたしませう 濱『隠したつて夫りやア不可ない、確かに
 二人で出て往つた、サ何所へ逃がしたか云へ す『夫りやア和郎さん無理
 と云ふ者でございます 濱『何が無理だ、汝エは乃公の家の 身上を潰す奴
 だに依つて深雪に變つて斯う爲て呉れる』と今度はおすを責めへ連れて参
 りましてあらう事か無い事か裸体に爲て天井へ吊し 濱『サア何うだく』
 と責めましたが今白状を爲れば必ず深雪が下河原へ往つた所へ追手が懸る
 モ 少しの所に依つて深雪の身の治まりが付いた後なれば好し白状を爲
 て追手が往つた所が相手が武士だと云ふから然う矢鱈には渡すまい、此や
 ア今白状爲ては何んにも成らぬと斯う断念を爲ましたから何う爲ても白

状爲ない然るに濱次郎は己れの女房だらうが何んだらうが怒に懸けては目
 が無いから目を刺出して 濱『サア云へく』と弓の折れてヒシリ〜
 …… す『餘りと云へば情の無い良人、僅か四十か其所等の金子の爲に生
 涯連添ふ女房を斯る手強き事を爲るとは何事ぞ、思へば〜お恨めしい良
 人、今は白状爲れば濟むかは知らないが行未供に斯んな人を亭主に持つ
 て居ては未始終が案じられる、又斯う云ふ家があつては深雪の如き西も東
 も知らぬ娘が何の位お苦勞を爲るか知れない、寧ろその事妾は此所で死んで
 此家を潰して呉れやうと或夜女房のおすは舌を嚙切つて相果てました。

○第二十二席

深雪尋ぬる人に逢す
 盲者となつて東海道を伴ふ

濱次郎は翌日此体を見まして別に悲しむ氣色も無く其儘寺へ葬むりまし

たがサア是れからと云ふものは評判がパツと高く相成りまして、甲那所の家へは内儀さんの幽霊が出ると云ふ事に相成りましたから御客も自然と落ちて来る此遊女屋と云ふものは客が澤山あると客の者を二十人なり三十人なりの遊女が喰べて金子が這入るからドン／＼野立つ、夫れが反對に成つて来ると遊女が内所の物を喰べて金子が儲からなくな成るから忽ち潰れる、去れば次第／＼に御客は落ちて来るし、情死がある、お職女郎が逃亡を爲る二枚目が病氣に懸ると云ふ有様でございますから爰に途々退轉を爲なければ成らつ場合に立至りました濱次郎は是れを苦に病んで病死、跡に残つて家を相續いたすべき者が無いから政府で遊女は残らず實家へ返して家は立腐れと云ふ、毎度申上げる通り悪い者には是れだけの報ひのあるのは誠にハヤ據る無い次第でけして閑話休題深雪は危き所を救はれて下河原へ着き

ますと兼て言付けて置た者と見へて直ぐ船長の座敷へ連れて行く和平が和「イヤ姐さん能くお出でだ悪い奴は濱次郎の野郎、其女房と云ふのは感心なもので鬼の女房に鬼神と云ふが彼の女房は佛だモ一遠に潰れて仕舞うんだけれども女房で持つて居るんだ、然し和郎さんの敵は天道様が取つて呉れるだらう何爲るモ一決して心配爲るには及ばんから安心してお出でなさい」若い男の傍へ置ては宜しく無からうと己れの傍へ置て深雪の様子を見るに身拵は宜しくは無いが誠に品格のある女で何う爲ても由縁ある立派な娘、誠に深切にしてやつてる由つて、漸く深雪は世の中に出た心持ち、唯涙を流して禮を云つて居ります、途中にお話しても無く唯今の大坂河口へ昇がつて夫れから旅宿屋へ泊つて、和「サアモ一此所は大坂だ、是れから京都迄は十三里、三十石と云ふ船へ乗つて行けば直き着く、此れ

で向ふで生土物の一ツも買つて行きなさい』と如何程かの金子を呉れる
 深雪『イ、エ桔梗屋のお内儀さんからお金子を貰つて居りますから 和』然
 し私の深切を無に爲るでも無いから夫れに金子は如何程持つて居たつて邪覺
 にも成らない持つて行かつしやい 深雪『有難う存じます』と其夜は泊つて
 翌日に成つて船エ載つて別にお話しも無く京都へ着きました、テ下河原と
 云ふのを聞いて出掛けた、往つた事は無いけれども元京都岡崎村に居り
 まして女中を供に連れて今日は清水の觀音だ、明日は北野の天神だと那方
 此方遊んで歩きましたから萬更知らない土地でも無い、由つて下河原と云つ
 て聞くと直きに分つた 深雪『少々物を承はります』往來の人が 甲『
 ハイ何んたい 深雪』此下河原と申す所に野尻阿蘇次郎と云ふ學校の先生
 がある筈でございますが何地でございますか 甲『向ふに見ゆるソラ大きな平

屋……あれが學校だつたが野尻先生と云ふのは何所かへ移轉したと云ふ事
 だ、けれども私は能くは知らないから確かに移したと受合う譯に行かない
 けれどもマア然う云ふ噂がありましたから那方へ往つて聞いて御覽なさい
 又深雪は驚いて 深雪『ア、……折角數々の憂目を凌いで此所ま
 で来て何れかに轉宅したといへば何所へ尋ねて行くことやら何うしたら好か
 らう』と心中に神佛を念じて来て見ると成程立派な學校がある玄關へ掛
 つて 深雪『お頼み申します 書生『ドレ』と云つて若い者が来て見ると
 好い女だ 男『何方から…… 深雪』ハイ私は筑前福岡矢部靱負と申す者
 の娘 深雪と申す者 先生に御目通りいたしたう存じます』取次に出た男が
 男『ハア左様でございますか……』當家の先生も怖い顔を爲て居るがなが
 く感心なものだ、大變な別嬪が尋ねて来たが先生那んな顔を……人

は見掛けに依られへものだなく、感心なものだ……へエー先生申上げます 先生「ハイ、男」エ、貴郎が毎度、私共に新地へ杯往つちや成られへ修業の邪寃に成ると小言を被仰るが其身正しからざれば禮せず自分の身を正しく爲て置かなければ意見は云へません先生も少と御嗜みなさるが好うございます 先生「何んだ嗜めなんと何を云ふのだから少つとも分られへ……何んだト 男「何んだなんて被仰つて筑前の福岡から何うも夫りやア素晴らしい別嬪さんが尋ねて来ましたぜ 先生「へエー…… 男「へエーなんてお老尾けなすつたつて無益でございます其縹緞の好いこと、云ふものは蛾蠶の肩、丹花の唇、沈魚落雁羞花閉月、涙を浮めて物を問ふ所の有様は雨に惱める海棠が露に打たれた櫻花芙蓉の花も將に耻ぢん斗りなり、口を開いて貴郎彼の位めに御約束いたしましたのに今に成つてほかへ御浮氣を…… 先生「何を云つて居やアがるんだ、乃公には少つとも分られへ 男「大變な立派な婦人が飛込んで来ました 先生「何爲る此方へ通して見る 男「へい…… 又玄關へ来て 男「此方へ 深雪「ハイ……

……「耻かしいが一杯で案内に従ひ奥へ通り、身拵が悪いが品行正しく兩手を突て外日宇治の螢狩り須磨明石の風待の時に御目に掛つた阿蘇次郎先生嬉しいやら悲しいやら胸は一杯涙を流して下俯向き 深雪「私は矢部鞆負の娘の深雪切望先生に御目通りをいたし御目に掛つてゐる、申上げた、いこと承はりたい事がございます筑前から重れくの艱難辛苦をいたして御尋ね申し上げました」傍に居た弟子が 甲「何うも察いなア……何うも筑前から重れく艱難辛苦して来るなんてはなかく、お安くれへことだ、乃公も那んな宜い娘に一度ア、云はれて見たいものだ羨しい事だア」先生

何人と云ふかと奴さん次の間に聞いて居た、スルと先生鹿爪らしく先生「
 エ、御顔をお上げなさい、私は矢部鞆負と云ふ御人を存じません御顔をお上
 げなさい、私の考へでは人違ひではありませんか、深雪「イ、エ此方の先生
 ……先生「此方の先生と云ふのは拙者でござる、深雪「ハイ……………」顔
 を上げて見ると白髪しらぎの混つて居る撫付けなでつけ頭あたま鼻はなは安座あんざを揺かて居る長ツ面ながつらの鬚ひげ
 ツ面の阿蘇次郎先生とは天地雲泥てんちうんぬいの違ひでござります、先生「私は太田文
 中と云ふて醫者いしやを業げふといたして居ります者で當家の先生と云へば未熟みじやくなが
 ら私わたくしでゲス、貴女あなたの尋たづねる先生と被仰おつしやるのは何んと云ふ方でござります
 深雪「ハイ私は深雪と申まをします者で、私の御尋おたづね申して来た先生と云ふの
 は野尻阿蘇次郎と云ふ先生で貴郎あなたのやうに御年おとしを召めした方ではありませ
 先生「夫そりやア深雪みゆきさんとやら成程御人なるほどおひとが違ちがひます先に居た先生は野尻阿蘇

次郎先生とか云つて大層好おとい男をとこだつたそうで……………ノ一山田、山田「然さうで
 ござりますとも私は能く知しつて居りますが先の先生と云ふものは業平なりひら様の
 やうな光ひかる源氏げんじの殿とののやうな實じつに好おとい男をとこで近所きんじよの娘むすめ小供達こどもたちが垣根かきねの間あひだ
 ら覗のぞきに來きましたが夫それに引替ひきかへ今の先生は鬼門除きもんよけの鬼瓦おにがはらみたいな玉子たまご
 とじを見みたいな面つらで……………先生「何を餘計なにかいな事ことを云いつて居かやアがる山田「
 そののじり先生とか云ふ方は故主こしゆに歸參きさんが叶かなつたとか云ふ事ことでござります、確たし
 が江戸へお出いでなすつたそうたで唯今ただいま此所こゝにお出いでの先生は太田文仲先生で
 學校がくかうの跡あとが空屋あきやに成なりましたに由よつて跡あとを買かつてお出いでに成なりました由よつて
 貴女あなたのお尋たづねなさる先生は江戸でござります誠に遠路とんろの所ところ御氣おきの毒様どくさまで…
 ……」と聞きいて深雪は、深雪「サムーン……………」と云ふかと思おもへば忽たちまちに持ぢ
 病びやうの癪しやくに籠とじられてバツタリ其所そのれへ倒たれましたギリ／＼齒はを喰く縛ひつ

て目を天眼にして居りまする 山田「サア大變だ先生厄介な者が飛込んで
 來ました如何いたしませう 文仲「野尻阿蘇次郎と違つて居るのは詮方が無
 へけれども貴様が餘まり 仰山に話しを爲たもんだから 癩が起つたんだ
 山田「然うじやアありません先生、先の人が餘まり好くつて貴郎が餘り悪る
 過ぎるから癩が起つたので…… 文仲「白痴ア云へ乃公が野尻と云ふ男に
 似て居たからつたつて詮方が無へ兎に角醫者の宅へ來て癩を起す杯は湯に這
 入つて死んだやうなもので當人の饒倅だソレ療治を爲てやれと是れから手
 を押へる弟子が足を押へる其所は家業柄の事でありまますから直ぐに先生が
 藥をやる氣が注ぐ物も云はずにギリ／＼／＼齒嚙みをして居りました
 が 深雪「イヤー残念……ナ和郎さんの様なお方ではございません文仲先
 生御羨やましう存じます」と云ふと飛懸つて文仲の頭へしがみ付く太田文仲

驚いて文仲サア大變だ氣でも違つたんだらう何しろ 藥は盛るけれども氣
 が違つちやア詮方が無いと云つてる内に弟子の頭をボカ／＼と毆打る飯炊き
 男を毆打る煙草盆を投げる奥へ飛込んで百味箆筒を引繰返す火鉢を投げ
 るイヤモ一手も付けられない事に相成りまして聽ての事に太田文仲の家を
 パーツと飛出して 深雪違つた／＼太田文仲のやうに醜男では無いモツト
 美男だ太田文仲のやうな醜男じやア無い違つた／＼、阿蘇次郎さんの方が好
 い男だ文仲厄介な奴が飛込んで來やアがつた乃公の醜男を村中披露めて歩
 いて居やアがると云ふ内に京都の町へ來て 深雪違つた／＼……』と云
 つて歩いて居る 町方「ソレ娘の氣違ひが來た」と云つて石を投げる者もあ
 れば馬の草鞋を投げる子供もある女が好くつても氣違ひじやア詮方が無い、
 夜るに成ると何所へ往つて寢泊りを爲るか白晝に成ると出て來ては町を歩い

て居りまする、されば誰が引取つて世話をして遣らうと云ふ者も無い、日々
 のやうに然うして居る内に京都を何時の間にかアラク立つて大津の八町へ
 来る、兼ねて京都に噂さのあつた女の氣違ひが来たと云ふので相變らず子
 供がからかつて居る内に爰に京都に旅宿屋をして居る井筒屋善右衛門と云ふ
 者がある深雪の氣違ひと云ふのを聞いて 善ア、一氣の毒千萬是れを放擲
 つて置くとき美くしい女であるから乞食仲間が強姦でも爲れるだらう 誠
 氣の毒千萬然うした日には生涯乞食に成つて仕舞つて詮方が無い見た所
 では品格のある所は賤しい者では無い』と云ふ所から私が世話をして
 やうと其所で善右衛門が引取つて物置を拵へて下へ叩いた藁を敷直して其
 上に地氣の上がないやうに藁を敷いて三度三度喰物は入れてやるア
 醫者にも掛けてやる所が二月三月癒る景色が無い小便大便垂れ流してあ

りまするから其小便臭いこと實に鼻を貫く斗り奉公人も 甲主人に
 奉公に来て安い給金を貰つて斯んな糞小便の世話まで爲せられて堪るもの
 じゃア無へ』と云つて嫌がつてる者でありますから善右衛門が素ッ裸体に成
 つて中の掃除をしてやつて女房も切望直してやりたいと云つて水を浴びて
 神佛へ祈りましたから其甲斐があつて漸くに落着きましたからヤレ嬉しや
 と思ふとガラリ目が悪く相成りました早く云へば逆上眼と云ふ三尺先きも
 相見へませんヤレ嬉しい氣違ひが直つて世話をした甲斐があると云つて居る
 と盲目に成つて仕舞つた盲目に成つても只今のやうに桐淵さんの様な先生が
 あれば格別其頃の事でありませうから完全なる所の醫者もございません
 に由つて日々悪く成る斗りだ時に着物を着せて髪を束れてやつて 善扱て
 姐さん阿女は何所の者だと云ふ』と此時に深雪は 深雪ア、一有難う存じ

ます國を云はうかと思つたが萬一正直に國を云へば親切に國表へ送り届けて呉れるだらう然う爲れば國へ行くと何んな憂目を見るか知れぬ何うでも斯うでも東へ往つて阿蘇次郎さんに逢ひたいと云ふ當人も一生懸命
 深雪誠の色々厚きお世話に成りましたが然し私は仔細あつて國所を申す譯には相成りませぬ名前は深雪東を心差して参ります者 善然うか和女の懐中物を預かつて居たがお金子と云ふ者は三文も無い櫛并は何所へ振落したか夫れも無し然うして東の何んと云ふ人を探しに行くんだ
 深雪左様でございます野尻阿蘇次郎と云ふ人只東路と聞いて居りまする斗り何所の何んと云ふ所であるか一向に存じませぬ 善誠に夫れは空な話した 深雪エ、兼ねて承はりましたが街道筋には三味線を悉て世渡りをする賢者と云ふ世渡りがあるそうで私は賢者に成つて三味線を知つて

居りますから街道を世渡りをいたしたう存じます 善イヤ藝は身を助ける程の不仕合せ豈夫斯んな事を爲て世渡りをして送らうと云つて覺えたる次第でもあるまいが何うも時代時節で詮方が無い夫れじやア然う爲るが宜い和女が國を然う云へば國の親の所へ届けて進げたいが國を云へば家へ届けられて何んな憂目を見るか知れんと云ふ所から隠して居るのであらう宜しい賢者にして進げやうと善右衛門が其所で深切にも三味線を一挺買つて呉れた然し何うせ好い物では無い撥は木の撥三味線はベコくであつたらう其所で深雪が胸に浮んだには阿蘇次郎さんから書て貰つたに由つて露のひぬ間を私が節付けをして三味線に合して悉いて歩けば又何うか縁があつたなれば阿蘇次郎さんに逢へないこともあるまいと愈々大津を出立をして江戸表を差して尋ねるのだに由つて一宿に五日や一週間位ぬは逗留を爲て居りました

然うして

露のひぬ間の朝顔に照らす日陸の情れなさにあはれ一ト村雨の
はらくと降れかし

と歌つて居るから誰云ふと無く朝顔の警者くと人が異名を付けました

甲「マイ朝顔は何うした 乙「昨日までは此宿に居たが今日は先の宿へ
立つて往つた 甲「然うか惜い事をした今度一晚招んで奴の好い聲を聞うと
思つて居たんだ惜いことをした」と云ふやうな次第でございます。

○第二十三席

深雪の苦心途に空しからず
伉儷全ふして天地に榮ゆ

扱て途中にお話しも無く矢部靱負の娘雪深こと朝顔は天津の宿を立ちま
して瀬田の唐橋打渡り水の流れと人の身の末は分らぬ淡路ヶ原草津石部横

田川水野の宿を次第に打過ぎて鈴鹿の驛や龜山を朝に打越し岩見川、庄野
を跡に石築師長くも此所は老乞ヶ坂追分を振替つて急がぬ旅の夕間暮れ桑
名を越へて伊勢と尾張の別れを過ぎ七里の渡し難無く越へ扱て長島を跡にし
て岩田大濱右の鳥宮の岩屋もハヤ過ぎて宮の熱田を遙拜し來つ、馴れにし
身の果は何んと鳴海や矢矧川、越へて名に負ふ岡崎宿、過ぎて思ひも遠江
濱松越えて追々と來つたるは唯今の駿河の國静岡でございます駿府の御城
下は實に其頃は大了たものでありまして只今迄は木賃宿へ泊つて居たんだ
が當節は錢を貰ひ溜めたに依つて木賃宿へ泊つて居た分には野尻へ逢うこと
も出來ないと思ふて小諏波離して居るもんだに依つて普通の宿屋へ泊つても
何所で斷はられる憂へも無し唯の乞食なら越後蒲原郡だとか、お江戸青山
百人町に鈴木主水と云ふ侍が………とかやつて居るんですが然んな下等な

者はやらない、高尚なものをやる、且つ聲と云ひ、縹緲と云ひ充分でござい
ますから酒の座敷へ呼ばれて御馳走に成ることがある、デ一番永く駿州府中
に逗留をして居りました、却説お話しが二ツに變つて野尻先生江戸表に暫
らく逗留をして居りましたが熊澤先生の下役に瀧口宇源太と云ふ者がある其
者を連れまして御用あつて今度備前岡山へ行かなければ成らんと云ふので江
戸表を立てて府中へ來り水口屋金兵衛と云ふ旅宿屋へ泊つてお酒が好きなお
方で其晩酒を飲みながらヒヨイと氣が注て見ると衝立に一輪朝顔が書て
傍に露の乾ぬ間が書てあります妙に思つた蕃山先生 了『ハテナ……コ
レ亭主 金『へい何んぞ御用でございませうか 了『イヤ外じやア無いが少し
聞きたいことがある此所の衝立に失敬なことを云ふやうだが珍らしい一輪朝
顔がある傍に露の乾ぬ間に何んとか書てあるな 金『左様でございませう

了『誰が此りやア書たんだ 金『是りやア此裏町に居ります手習師匠の
先生が書きましたので 了『ウムー何んと云ふ方だ 金『風流堂と申しま
す 了『風流堂と云ふ先生が 金『へい此露の乾ぬ間はさいばらとか申し
まするそうで今此朝顔の文句が大層流行爲るもんですから前には何んで
ございます鯉の瀧登りが書いてございませうが子供が破きましたから私
白紙で張つて置きました所を裏の先生が遊びに來て斯様に朝顔を一輪書て
呉れました 了『ウム然うか 金『何んでございませうが御氣に叶つたのでご
ざいますなら差上げましても宜しうございませうから 了『然んな物を貰つた
つて詮方が無いが流行るテへのは何う云ふ次第で 金『へエ夫れは斯う云ふ
次第でございませう此土地に朝顔警者と云ふのが居ります警者つたつて片ツ方
目玉が飛出して水ツ鼻を垂らして越後蒲原郡か何にかをやるんでございま

すが其替者なぞは實に好い女で先づ替者の方じやア大名でございます
了『大名の替者と云のがあるか 金『然んな者はございませんがなか
女も宜うございます惜いかな逆せ目だと云ふことで段々聞いて見ると京都
で氣が違ひまして井筒屋と申す大津の宿屋の世話に成つて氣が違つたのが直
ると直ぐ目が悪く成つたのださうで江戸へ是れから又情夫を尋ねて行くん
だそうで何所の座敷へ出て外物の物をやりません必ず露の乾ぬ間をやりませ
夫れも一時も二時も夫れ斗りやつて居る譯じやアございませんので好めば何
んでもやりませす、琴、胡弓、三味線、月琴、太鼓、琵琶、笛、弓、鐵砲、棒、
劍術、柔術、相撲、カツボレ、何んでもやりませす 了『虚を吐け、盲目に鐵
砲が撃てるか 金『へエ、マア早く云へば十八番が朝顔で餘まり陽氣じやア
ございませんが土地の者が、朝顔くんと申します御大家様で甚だ恐れ入りま

すが御徒然なら招んで差上げませうがなか／＼好い女でございます 了『
黙れ、武士たるべき者が左様な者が招べるか』と口では云ふが腹の内では
了『何んだか深雪の様に思はれるが切望一ツ招んで見たいものである』とは
思つて居るが下役の前に對して熊澤次郎左衛門陪臣でこそあれ三千五百石逢
つて見たいと顔を皺めて居る様子を白眼んだ瀧口宇源太 宇源太先生申
上げます斯様なことを御前の前で申上げては甚だ恐れ入りますが貴郎がお
召しなさる理由には行きますまいが拙者なら好うございませう如何でござい
ます、私が招きますから御聞遊ばせ』と聞いた熊澤次郎左衛門は大きに悦
びまして 了『然んなら然ふ云う事にして貰はう私も聞いて見たいから……
金『委細承知いたしました』と金兵衛が見世の者に呼びにやる直様朝
顔やつて来て 深雪『召しましたは此お座敷……』と云ふのを見ると了海

大きに驚いて「了」扱ては深雪であつたか福岡から私の所へ尋ねて来たに違ひ無い予が居らん所から女の狭い了見から發狂いたして發狂が直つて目が潰れた事と見へるア、一思へば氣の毒千萬の事だ』差向ひなれば手を取つて傍へ引寄せ扱て野尻阿蘇次郎の熊澤だと云ふべき所ではあるが侍と云ふ者は大小の手に對して然う云ふ事が出来ない」と涙を心の内へ飲んで居る内に一曲終る所へ「男」エ、申上げます唯今朝顔さんに口が怒りました、明きましたらば切望お貰ひ申したう存じます「了」ア、一然うかい此方へ引留めて置ても氣の毒千萬、夫れじやア連れて行くが好い、瀧口何うも琴を調べさしても旨い、唯感服の外に無いが外から口が怒つたと云へば是非も無い、手當をしてやんなさるやうに……」

「瀧」じやア手當をしてやりませう』と云つて何程か金子を包んで渡す、深雪は厚く禮を述べ

て出て行きながら虫が知らずか 深雪「ア、……片々の目が怒い何うも御聲の様子が野尻先生に似て入つしやるが承れば野尻では無い瀧口字源太とやら……何んといしたものであらうか』と後髪を引かれるやうな心持がして歸つて行く、扱て夜が明ける熊澤了海愈々立つ時に瀧口に内々で「了」モシ彼の警者が来たなれば切望是れを届けてやつて呉れる』と一封の書面を渡して此所を出立いたしました、スルと入れ違ひに朝顔がやつて来る、深雪「金兵衛さん少し承ばりたうございませうが昨夜の御客様は何んな御様子のお方でございませう 金」そ、其おお客様が一封の御手紙を和女にやつて呉れると渡してお出でに成つた、盲人に手紙と云ふのもおかしなわけだが多分人に讀んで貰へと云ふのだらう下役人もあるもんだに依つて……斯う云ふ名宛の人を和女知つて居るかい 深雪「ハイ何んと書いてござ

います 金『熊澤次郎左衛門了海』と野尻阿蘇次郎としてある』喫驚おどろ
 いで 深雪『エ、ー……扱てはそれが野尻様であつたか……熊澤次郎左
 衛門……ア、ー熊澤様が野尻様と知つたなら斯う云ふ事にも成らなかつ
 たものを熊澤先生のお氣が注かないのか阿父さんのお言葉が落ちたのが……
 ……是れが金兵衛さん兼て妾が探して居る野尻阿蘇次郎と云ふ人でござい
 ますお國へお出でなさる……夫れでは斯うして居る理由にはいかない』と
 物も云はずに馳出だす 金『ア、ーコレ待たつしやい兼て私も話しに聞い
 て知るて居るに由つて相談相手に成つてやる程にマア〜待つて呉んなせへ
 深雪『有難う存じますが然うして居る内も心懸り……』と承らくの間
 此所に居て道の様子も知つて居りますから杖も曳かすにドン〜〜遣
 つて参つた阿部川の此方、演劇や浄瑠璃で爲ると大井川だが實は阿部川でこ

ざいます今は橋が掛つて居るが其時分は橋も何も掛つちやア居りません此頃
 日々降り續いたる霖雨の爲に俄にドツと水が押出して来て河が止つた跡か
 ら追馳けて來つたる金兵衛が 金『ア、ーコレ朝顔盲目じやア見へめへが阿部
 川は川止めだ……ヤ、ーコレ皆んな留めて呉れ〜』と云つて水口屋金兵衛
 追掛けて來る 一同『ソレ……』と云つて留める船を〜と云ふ内に隙を
 伺つて 深雪『川が留つて行けなければ斯うしても……』と云つて突然飛
 込む水音高くドブーン 一同『ソレ氣が違つたに違ひ無いと水口屋金兵衛
 始め大勢で引揚げまして斯う〜斯様と云ふから 金『宜しい夫れ程迄に思
 ふ男なら私が備前の岡山へ送り届けてやるから決して心配をしなさんな、
 かならず逢してやらん事は無い』と泣入る深雪を漸くに我屋へ連れて参りまし
 て旅の仕度をいたさせ確かな駕籠屋を命令けて然うして通し籠駕で備前の岡

山へ参りました』熊澤次郎左衛門先生と云ふと餘り評判が好すぎる所から高木は風に憎まれる譬への通り遂に閉門の身と相成りまして勝手に門を這入る譯に行かない、此所で又もや歎きを増し如何いたしたら宜しからうと云つて又もやワツと泣倒れて 深雪閉門で御目に掛ることが出来ない如何いたしたら宜しからう』と云ふ所へ通り掛つたのは巡禮が一人千ヶ寺参りが一人、是れ誰れであるかと云ふと、千ヶ寺参りと云ふのは矢部鞆負の家來の關助と云ふ仲間、巡禮姿に成つて居るのは深雪の乳母の淺香、淺』お娘様ではございませんか 深雪然う云ふ聲は淺香では無いか 淺』ハイ……ア、一逢いたうございしました貴女が家出をなすつてから阿母様が深雪々と明暮れ歎いて居つしやるから見るに見兼ねて關助と二人で御探し申しに出掛け、多分は京都下河原と斯う存じましてお尋ね申上げま

したが夫れから先は發狂遊ばして身を投げて死んだか、首を縊つてお果てなされたか分らぬとの事でありますから心細くも東海道をだんく〜と靜岡迄お尋ね申して委細は委しく聞きました其故此岡山へお尋ね申して参りましたが御目に掛るとは主従盡せぬ緣、然し熊澤様は御閉門とのおんこと又貴女も其御目では致し方ありませんから今一度福岡へお歸り遊ばして目の療治をなすつて阿父さん阿母さんへお話しをなさいまし此所に歎いてお出でなされた所が詮方がございません』夫れではと云ふので此所で一度筑前へ立歸つて来る其所で金銀に明かして目の療治をいたしましたが東海道の醫者とは違つて筑前福岡立派な醫者があるもんだに由つて落着くに從つて追々快方に向ひ唯今では殆んど以前の通りに相成りましたから阿父さんの所へ手紙を出す、阿父さんから熊澤先生へ知らせる、所が前に幸

三郎が橋渡しをいたし結納取替せを済ましたら今日は筑前から来るか明日は来るかと待つて居たが来ない、靱負を實に了海に面目次第も無い爲に深雪は死にました御諦め下さいと云つた所を駿河の府中で逢つたから不思議に思つて居る所へ靱負からはれ〜の次第と委しく物語りましたから了海始めて會得して扱て殿様から閉門も許りたものでありますから江戸表へ再び出て来て此所で深雪も江戸表へ出て来て此所で始めて芽出度く夫婦と相成りました所が氣の毒千萬にも餘り苦勞をした爲か深雪は其翌年子供も出来ずに病死いたしました、テ私の爲には狂人に成り、目も潰したに由つて深雪の靈前に對して妻は迎へまいと獨身で居りました、然るに其後何う云ふ次第であるか再び備前岡山を浪人して下總の佐倉へ来て學校を開いて居る内に此所で熊澤次郎左衛門先生病死をいたしました、佐倉に最上出羽守

りらいさはなへちせんいひとそのひとこんりうところてらくまきはれうかいせん家來鯖鍋越前と云ふ人がある其人の建立いたしたる所の寺に熊澤了海先生は骨は葬むつてございます、唯今以て其墓は其寺に残つて居りますが墓にかたなきつしよついで居ります、滅多に人に怨みを受けるやうな事は無い人でありますが多くは備前家の改革の時に切腹又は改易申付けられたる所の其遺族、取るに足らざる所の鼠輩のいたしたる業であります、何爲ても熊澤了海と云へば學者仲間の内に其名を今以て歴然残しあるは結構、朝顔日記の人情談も先づあらく斯の如くでございます、看客の御目御拝借の儀は謹んで御禮申上げます……。

朝 顔 日 記 終

明治四十四年八月九日印刷

明治四十四年八月三十日發行

不許複製

朝顏日記

著者

講談俱樂部

發行者

中村惣次郎

印刷者

今成温平

印刷所

今成活版所

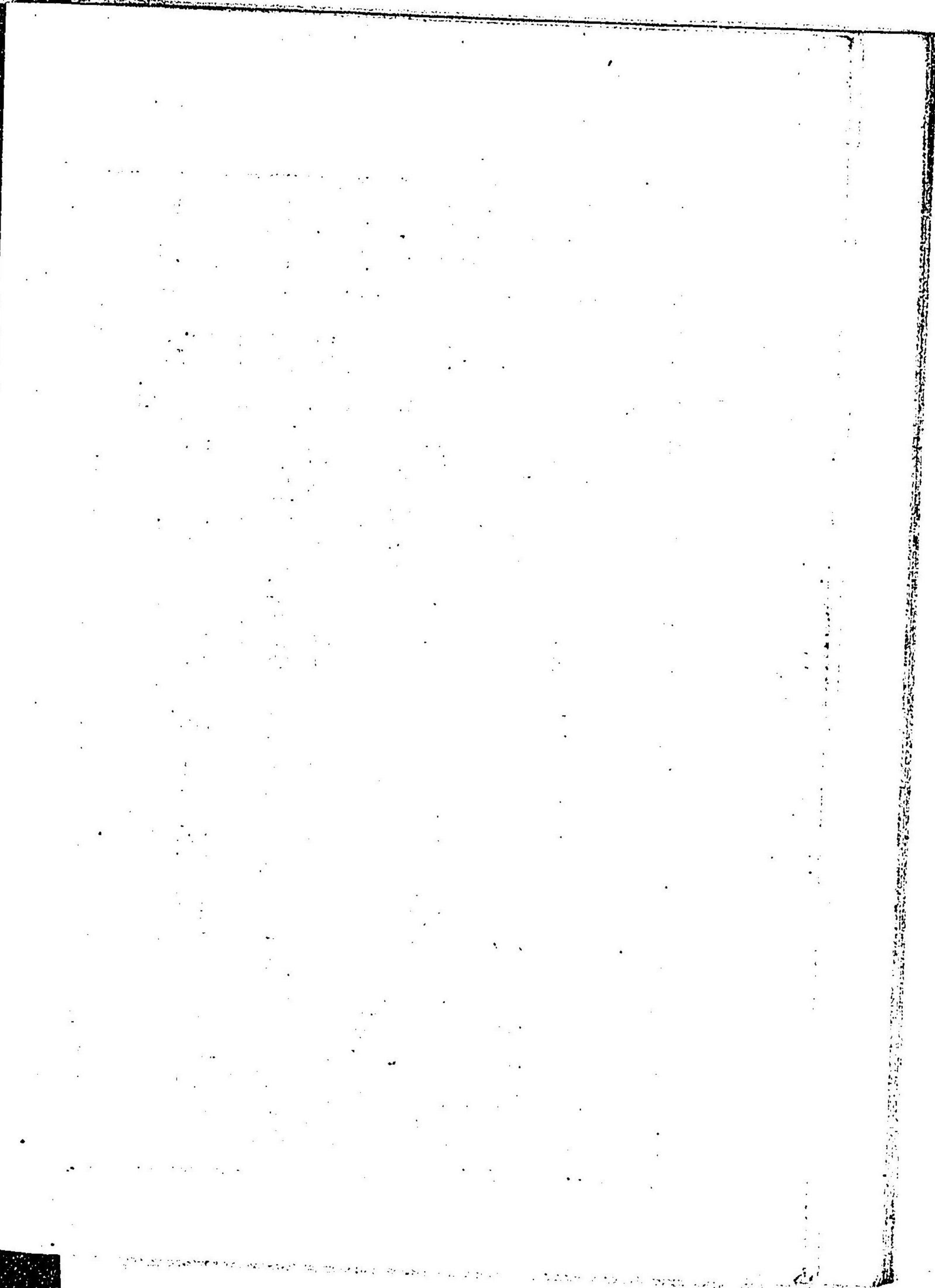
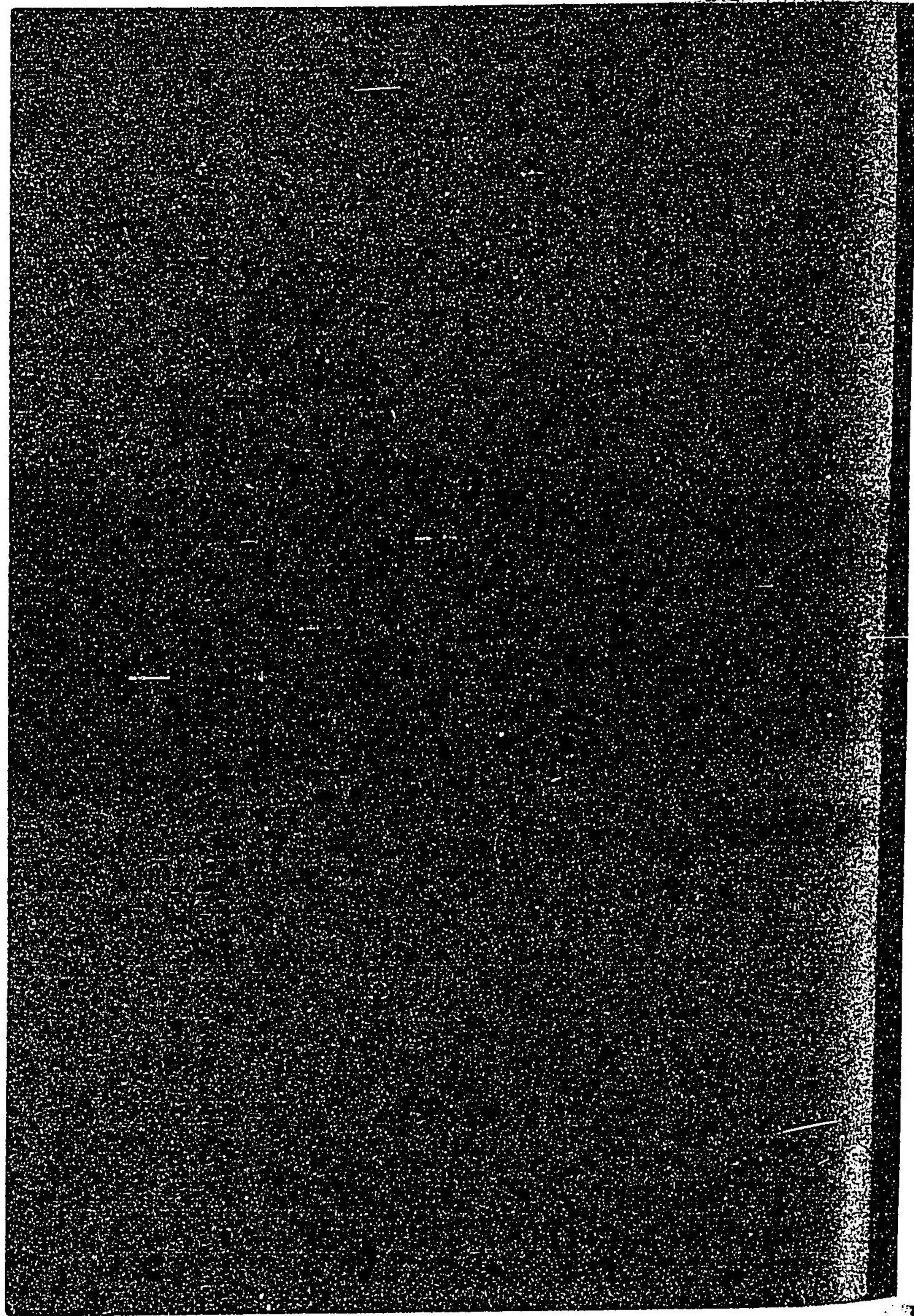
發兌元

日吉堂

東京市淺草區旅籠町二丁目七番地

定價金貳拾五錢 | 郵稅金四錢





266
407

